

夏の教育セミナー 2026年実施

講演者プロフィール・メッセージ

主催：日本教育新聞社 / 株式会社 ナガセ (東進ハイスクール・東進衛星予備校)

第13回 教育で日本の未来をつくる

6.25 現在 敬称略

申込はこちら▶



8.3 東京会場 13時～

ベルサール新宿グランド



基調講演

東京 大阪 オンライン

奈須 正裕

上智大学 総合人間科学部教育学科 教授
第13期 中央教育審議会 委員

プロフィール 東京大学大学院教育学研究科修了、博士(教育学)。国立教育研究所教育方法研究室長、立教大学文学部教授等を経て、2005年より現職。中央教育審議会教育課程部会長。専門は教育心理学、教育方法学。著書に『「資質・能力」と学びのメカニズム』(東洋館出版社)、「次代の学びを創る知恵とワザ」(ぎょうせい)、「個別最適な学びの足場を組む」(教育開発研究所)など。

メッセージ テーマ「教育で日本の未来をつくる」

変化の激しい時代であり、学校教育もかつての成功体験に安住し、慣性に流されるのではなく、常にアップデートすることが求められています。と同時に、学校教育は社会の変化に追従するだけの存在ではありません。次世代を担う子どもたちを育て上げることを通して、未来社会を先導的に建設する営みでもあります。具体的な動きが予測困難であるからこそ、学習指導要領も固定したコンテンツの教授から、柔軟に活用の利くコンピテンシーの育成へと学力論の重心を移動させてきたのです。日本の未来をつくる営みとしての学校の役割、教師の仕事とは何か、共に考えたいと思います。



特別講演②

東京 大阪 オンライン

栗原 聡

慶應義塾大学 理工学部管理工学科 教授

プロフィール 一般社団法人・人工知能学会・会長。慶應義塾大学共生知能創発社会研究センター・センター長。博士(工学)。NTT基礎研究所、大阪大学、電気通信大学を経て、2018年より現職。科学技術振興機構(JST)さがし「社会変革基盤」領域統括。オムロンサイニクエックス・社外取締役、一般社団法人・日本DX人材アセスメント機構・代表理事、一般社団法人・匠和会・代表理事、総務省・情報通信法学研究会・構成員など。マルチエージェント、複雑ネットワーク科学、計算社会科学などの研究に従事。著書『AIにはできない—人工知能研究者が正しく伝える限界と可能性』(角川新書)、『AIの倫理 人間との信頼関係を創れるか』(角川新書)、『AI兵器と未来社会キラーロボットの正体』(朝日新書)、編集『人工知能学事典』(共立出版、2017)など多数。

メッセージ テーマ「到来する人とAIの共生社会における2つの道」性能が加速的に向上する生成AIであるが、その実態は効率化のための活用であり、我々はAIを本来の用途である、道を切り拓くイノベーションのための活用がまだできてはいない。一方、昨年からAI利用における懸念についての指摘も増えつつある。盲目的なAI活用はそのままAIへの依存に繋がり、特に若年層におけるAI依存の着実な進行為大いに懸念される。今後、さらにAIが当たり前になっていく社会において、我々はどのようにAIと向き合えばよいのか？ 今後顕著になるであろう、我々が向かう2つの方向、すなわちAIを使う側になるのか、それともAIに使われる側になるのかについて考える。



特別講演①

東京 大阪 オンライン

合田 哲雄

文部科学省 高等教育局長
兵庫教育大学 客員教授

プロフィール 倉敷育ち。92年に旧文部省入省。福岡県教育庁高校教育課長、NSF(全米科学財団)フェロー、高等局企画官、初中局教育課程課長・財務課長、内閣府・審議官、文化庁次長などを経て現職。国立大学の法人化、学習指導要領改訂、大学教育質転換答申、科研費、高等教育修学支援新制度や10兆円大学ファンドの創設などを担当。単著『学習指導要領の読み方・活かし方』、共著『学校の未来はここから始まる』、近共著『多様性と学びの質は両立できない?』等。

メッセージ テーマ「2040年の社会・地域・デモクラシーと高校・大学」

2040年の社会・就業構造を踏まえ、各地域において医療、福祉、産業、インフラ等を支える人材を育成する大学が持続し、大都市圏の大学の文理分断からの脱却による日本全体の大学の分野、地域のバランスが不可欠となっている。高校段階での理数教育や専門高校の重視、大学の理工・デジタル分野の拡充や文系学部のダウンサイジングと数理併修、高専の質量両面にわたる充実などの政策が実を上げるためには、日本固有の文系・理系の分断構造や「とりえず普通科」、「女子は文系」、「理数科目を捨てて大都市圏の大規模大学に進学すれば生涯安泰」といった社会の根強いバイアスを乗り越える必要がある。その具体的な方策について議論したい。



特別講演③ / 英語

東京 大阪 オンライン

安河内 哲也

東進ハイスクール・東進衛星予備校 講師

プロフィール 中学生から社会人までの英語力を劇的に向上させることで定評がある。著作の累計は350万部超。検定教科書『My Way 論理表現』代表著者。各種教育機関や試験機関において、講演や監修等の業務を行っている。また、文部科学省や東京都の英語教育関連審議会の委員も歴任。iU情報経営イノベーション専門職大学客員教授。複数の中学・高校の顧問としてActive English Programを実践。

メッセージ 皆さん、AIやICTを使うことが目的になっていませんか？ 大切なのは、ツールそのものではなく、それを使って何を実現するかです。今では画像や音楽、動画やアプリまで誰でも簡単に作れる時代になりました。しかし、どのように活用し、教育や学びに結びつけるかは別の話です。今回は、生成AIを活用して授業や教材を進化させる具体的な方法や、学習者の可能性を広げる実践例をたっぷり紹介します。明日からすぐ使えるヒントとアイデア満載の講座です。ぜひご参加ください。



数学

喜田 英昭

広島大学附属中・高等学校 教諭

東京 大阪 オンライン

プロフィール 1975年生、福岡県出身。2000年に広島大学大学院教育学研究科教科教育科学専攻を修了。2000年より福岡県立三池工業高等学校、2001年より広島大学附属中・高等学校に勤務。発見的・探究的な教材の開発、相互評価を行う問題作成学習、SSHでの課題研究指導、統計的な見方・考え方の育成など、主に高校数学における授業研究に取り組んでいる。『多角教、横から見るか？ 縦から見るか？』(教育科学/数学教育、2023年10月号 No.792)、教師教育講座第14巻『中等数学教育』(小山正孝編)第9章「高等学校『幾何』内容の学習指導』などを執筆。令和7年度広島大学附属中学校園優秀教育賞を受賞。

メッセージ 生成AIは、授業準備や探究活動の支援において大きな可能性をもつ一方で、誤情報、架空の参考文献、個人情報扱い、AIへの依存など、多くの注意点もあります。今回の講演では、「高校数学における探究と生成AI活用—現場教員として考える、問いを点検するための使い方—」をテーマに、生成AIを「答えを出す道具」としてではなく、「問いを点検し、授業化を支える道具」として活用する方法を考えます。教科書型問題を探究的に広げる場面や、課題研究を支援する場面を取り上げ、不適切なプロンプトと適切なプロンプトを比較しながら、現場で使える活用の仕方と注意点を参加者の先生方と一緒に検討したいと思います。



理科

日比野 良平

岐阜県立 岐阜高等学校 教諭

東京 大阪 オンライン

プロフィール・メッセージは
ウェブサイトで順次公開します。



多くの先生方
ご要望にお応えして
理科・地歴公民の
分科会を新設!!



探究

金本 奈津美

奈良県立 畝傍高等学校 教諭

東京 大阪 オンライン

プロフィール 民間企業で3年間の勤務を経て、奈良県の公立高校教員に転身。2018年より奈良県立畝傍高等学校に赴任し、英語科教員として現在9年目を迎える。2022年度より4年間指定の「研究開発学校」の取組や学校設定科目「グローバル探究」の科目運営に携わる。生徒個人が興味・関心を発見し、深めることができる機会の創出を目指し、外部講師を招聘するほか、生徒が主体となって運営するプロジェクトの伴走者を務める。

メッセージ 本校では、スーパーグローバルハイスクール(SGH)をはじめ、令和元年度から3年間の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」、さらに令和4年度からの4年間「研究開発学校」の指定を受け、探究学習を中心に、生徒が興味・関心を発見し、それを深めながら自身の生き方やキャリアを考える取組を進めてきました。本講演では、これまでの実践の中で重ねてきた試行錯誤のプロセスや、生徒たちの声を交えながら、本校のありのままの取組をご紹介します。また、ご参加いただく先生方からも、ご意見や各校での実践事例をお聞かせいただき、今後の取組をより良いものにしていくための学びや気づきを共有できれば幸いです。



国語

辻 孝宗

西大和学園中学校・高等学校 教諭

東京 大阪 オンライン

プロフィール 1975年生まれ、岐阜県大垣市出身。西大和学園で10年以上「東大古文講座」を担当し、多くの生徒を東大合格へ導く。100人規模の授業は立ち見が出るほどの人気を誇り、最小限の努力で学力をトップレベルへ引き上げる指導法は生徒・教員から絶大な支持を得る。近年は一般向け講演も展開。著書に『辻孝宗のロジカル古文読解』(KADOKAWA)や、『一度読んだら絶対に忘れない国語の教科書/文章術の教科書/古文の教科書』(SBクリエイティブ)がある。

メッセージ テクノロジーの爆発的な進化により、不確実性が増す現代社会。この激変期において、生徒たちがこれから向き合うべき「他者の言葉」や文脈の重みについて、改めて捉え直す必要があります。現代とは全く異なる時代や環境を生きた人物が残した言葉を紐解くとき、表面的な解釈だけでは届かない領域があります。相手が立っていた地平にまで想像力を広げ、その内面に迫ろうとする緊迫したプロセス。私自身が日々授業の中で試行錯誤しながら、言葉の背後にある世界をどう紡ぎ出しているか、その実感をごに提示します。



地歴公民

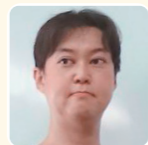
本保 泰良

東洋大学附属牛久中学校・高等学校 教諭

東京 大阪 オンライン

プロフィール 大学では日本史学を専攻。星槎大学大学院では、知識やアイデアを視覚的に整理するために使用されるコンセプトマップを活用した授業デザインを研究。高校教員として「歴史総合」「日本史探究」を担当し、問いを用いた探究的な授業を実践。著書に『書いて深める日本史 論述問題集』(山川出版社)、『わけがわかる日本史』(Gakken)のほか、『社会科教育』(明治図書出版)をはじめ、教育雑誌・日本教育新聞等に授業実践発表多数。第74回 福島県高等学校地理歴史・公民科研究会では講師、教育シンポジウムではパネリストを務める。

メッセージ 私は教科書を中心に授業を展開しています。教科書の記述をどのように読み解いていけるのか。「だから教科書に、こう書いてあるのか」と腑に落ちる授業を心掛けています。また、教科書の記述に疑問を投げかけ、例えば歴史と地理を融合・連携させることで、生徒の深い学びを促す取り組みを実践しています。さらに、生徒自身に問いを立てさせ、その問いに基づいて生徒に授業を作らせることも行っています。私が大学院で研究したコンセプトマップは、歴史の授業でも効果を発揮します。教科書の理解に基づいた論述問題に取り組ませることで、生徒の思考力・判断力・表現力を高めていきます。生徒の主体的な学びにつながる授業実践の一例として、ご覧いただければ幸いです。



情報

田中 健

愛知県立 高蔵寺高等学校 教諭

東京 大阪 オンライン

プロフィール 2005年、名古屋外国語大学国際コミュニケーション研究科博士前期課程修了。修士(インターネット言語教育学)。私立高校教諭、他の愛知県立高校教諭を経て、2020年より現任校の情報科専任教諭。「教科書・指導書 情報I、情報I Next」「プログラミングドリル」(数研出版)、「全国大学入試問題正解」(旺文社)、「でぶどり」と学ぶ15歳からのITパスポート」(CQ出版社)などの書籍執筆のほか、教科『情報』関連の各種試験に携わる。

メッセージ 講演タイトル『「情報」の授業、好きですか?』日々守備範囲が広がりが続ける、この「情報」という教科の特性、ついていだけて死w なのに2年前からは共通テストにも導入され、呼応するかのように仕事も増えて—もう「情報」の教員免許だけ捨てたらか! ?とかよぎる先生、いらっしやいますよね。本分科会では教科『情報』の面白さを、講演者が卒業生から「良い意味でわちゃわちゃとした授業を展開し…」と評された内容をもとに見出してみようと考えています。キーワードは、先生から放たれる何気ない一言の圧倒的存在感と、全く以てしょうもない下世話なネタ。希わくは、先生方の『情報』の授業を一番楽しんでいるのは先生方自身であるよう。

夏の教育セミナー 2026年実施

講演者プロフィール・メッセージ

主催：日本教育新聞社 / 株式会社 ナガセ (東進ハイスクール・東進衛星予備校)
第13回 教育で日本の未来をつくる 6.25 現在 敬称略



申込はこちら▶

8.6 大阪会場 13時～

スイスホテル南海大阪



基調講演

東京 大阪 オンライン

岩本 悠

一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム代表理事
第13期 中央教育審議会 委員

プロフィール 東京生まれ。学生時代にアジア・アフリカ20ヶ国の地域開発の現場を巡り、その体験学習記『流学日記』を出版。その印税等でアフガニスタンに学校を建設。幼・小・中・高校の教員免許を取得し、卒業後はソニーで人材育成・組織開発・社会貢献事業等に携わる。2007年より隠岐島前高校魅力化プロジェクトに従事。2015年から島根県教育魅力化特命官として教育と人づくりを推進。2016年第一回特別ソーシャルイノベーター最優秀賞(日本財団)受賞。2017年に一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォームを設立。文部科学省中央教育審議会、経済産業省産業構造審議会、内閣府総合科学技術・イノベーション会議等の委員。2025年より、文部科学省中央教育審議会委員。共著に『未来を変えた島の学校-隠岐島前発ふるさと再興への挑戦(岩波書店)』『地域協働による高校魅力化ガイド-社会に開かれた学校をつくる(岩波書店)』

メッセージ テーマ「教育で日本の未来をつくる」

激変する社会のなかで、学校の枠を越えた「協働」や「探究」、「越境」の重要性が高まる一方、現場では具体的な仕掛けづくりや取り組みに向けて模索する先生も多いのではないのでしょうか。本講演では、隠岐島前高校での実践や「地域みらい留学」の歩みを経て、現在は「高校教育改革を実現する会」の呼びかけ人として活動するなかで見えてきた高校教育の新たな兆しを共有します。「生まれた環境は誰も選べなくても、学ぶ環境は誰もが選べる時代へ」という想いのもと、これからの高校教育のあるべき姿や次の一手を共に探っていきたくと思います。



特別講演②

東京 大阪 オンライン

川村 秀憲

北海道大学 大学院情報科学研究科 教授

プロフィール 2000年 北海道大学大学院工学研究科博士課程期間短縮修了。博士(工学)。北海道大学大学院情報科学研究科助教、准教授を経て、2016年より北海道大学大学院情報科学研究科教授。2007年～2008年 日本学術振興会海外特別研究員、ミシガン大学客員研究員兼任。人工知能の研究に興味を持ち、ニューラルネットワーク、ディープラーニング、機械学習、進化システム、マルチエージェントシステム、データマイニング、ロボティクスなどの研究に従事。企業との産学連携実績多数。(株)調和と技研、AWL(株)、TIL(株)、(株)Aill、(株)Innovation Base 北海道の各社 Co-founderをはじめ、多くの民間企業の社外取締役や技術顧問を務める。人工知能に関する論文多数。Sapporo AI Lab 所長。

メッセージ テーマ「AIの進化と未来」

今回の講演では、人工知能の核となるニューラルネットワークの原理から始まり、ChatGPTなどの大規模言語モデルの仕組み、今のAIでどのようなことができるのか、そしてAIが発展した社会で我々人どのようなところで価値を発揮していくべきかについてお話しします。



特別講演①

東京 大阪 オンライン

今井 裕一

文部科学省 大臣官房審議官 (初等中等教育局担当)

質疑応答あり

プロフィール 1995年中央大学法学部卒業。同年、旧文部省入省。愛媛県教育委員会保健スポーツ課長、高等教育局教員養成企画室長、専門職大学院室長、初等中等教育局教育制度改革室長、大臣官房総務課副長、内閣参事官(内閣総務官室)、情報教育・外国語教育課長、スポーツ庁政策課長、文化庁政策課長、大臣官房参事官などを経て、2025年より現職。

メッセージ テーマ「高校から大学・大学院等を通じた人材育成システム改革に向けて～2040年を見据えた高校教育改革を中心に～(仮)」

現在、わが国の高校教育行政は大きな変革期にあります。本年4月から、所得制限の撤廃など大幅拡充された高等学校等就学支援金制度がスタートしました。これにより、私立高校を含め高校教育への「機会」確保がより強化されるなど個人支援は大きく進展する一方で、高校教育の「質」を担保する観点から、公立高校をはじめとする機関支援が急務となっています。また、2040年を見据えれば、少子高齢化・生産年齢人口の減少・地方の過疎化等が一層深刻化を増し、AI等の技術革新が爆発的なスピードで進み、就業構造の大転換も避けられない中、「次代」を担う子供たちに、予測困難で不確実な将来を自立して生きていく能力や個性をどのように育成していくべきなのか、高校から大学・大学院等を通じた人材育成システム改革という視点を、高校側から皆さんと一緒に考えてまいります！



特別講演③ / 英語

東京 大阪 オンライン

武藤 一也

東進ハイスクール・東進衛星予備校 講師

プロフィール 基礎から東大レベルまで、生徒のニーズに応え、やる気を引き出す授業に定評がある。全国各地で公開授業を年間100回以上行う。英語学習は「正しく。楽しく。」。授業は「切り口と見せ方」「適切な問いかけ」が信条。模試作成、参考書執筆も手がけ、「共通テスト英語リスニングドリル(東進ブックス)」、学校採用品の「Reading Flash(桐原書店)」など著書多数。英検1級。TOEIC試験4技能(LRSW合計)1390点満点。Cambridge CELTA Pass Grade A(CELTA合格者の上位約5%)。

メッセージ 私は授業では常に「切り口」と「見せ方」を意識しています。同じ教材でも、工夫次第で授業の印象と効果は大きく変わります。授業中は、生徒の発言を促す「問いかけ」を重視しています。問いかけはセンスではなく、技術です。模試作成やCELTAを通して得た技術をご紹介します。授業準備には生成AIを活用していますが、それにより「切り口」と「見せ方」が一層重要になっていると感じています。AIを取り入れた授業準備について、実践的な手法をお伝えします。最後に、AIの進化が進む今、英語を学ぶ意義についてもお話できればと思います。



数学

菅原 謙

宮城県仙台第三高等学校 教諭

東京 大阪 オンライン

プロフィール・メッセージは
ウェブサイトで順次公開します。



理科

岩淵 寛

東京都立 日比谷高等学校 主任教諭

東京 大阪 オンライン

プロフィール 都内の私立中学校・高等学校および都立中学校・高等学校において、長年にわたり理科教育に携わり、生活指導主任、進路指導主任等を歴任。生徒主体の実験を重視した授業実践を探究し、その成果を継続的に発信している。都派遣教員として東京学芸大学大学院で教職修士(専門職)を取得。現在はグローバル事業部主任として、SSH事業および東京都GE-NET20事業を推進。日本理化学協会企画運営部副部長として全国理科教育大会の運営を支え、教師相互の研鑽に貢献。東京都高体連剣道専門部競技副委員長、剣道錬士六段。

メッセージ 理科教育において、生徒が自ら実験に向き合い、その営みを通して学びを深めていくことには、いかなる教育的意義が宿るのでしょうか。本講演では、長年にわたる授業実践と教育学研究の蓄積を礎として、実験を通じて育まれる学びの本質を、参加者の皆様とともに見つめ直します。「探究・研究」と「探究的な学び」のあいだにおいて、生徒が進路へとつながる学びと、人生を豊かに照らす学びとを往還していくために、教師はいかに授業を構想し、寄り添い、導くべきか。学校という場においてこそ成し得る学びの環境について、未来に向かって共に考究する機会といたします。



探究

大西 洋

市立札幌旭丘高等学校 教諭

東京 大阪 オンライン

プロフィール 1976年、福島県出身。東京学芸大学を卒業後、福島県で教鞭を執る。東日本大震災を経て札幌へ移住、市立札幌開成中等教育学校で国際バカロレア(IB)のプログラムコーディネーターを務め、アジア地区IBENメンバーの一員としてIBの普及に尽力している。現在、市立札幌旭丘高等学校数理データサイエンス科でSSH副委員長としてカリキュラム構築の一端を担っている。学校設定科目「SS統計学」を考案し、探究活動への活用を想定した統計指導に注力している。

メッセージ 昨今、社会における統計の重要性が増しており、統計の素養を身につけた人材のニーズが高まっております。現行の学習指導要領においては、数学Bにおいて推測統計について学ぶ機会がありますが、現場では統計の理論を学ぶことに終始し、それらの知識・技能を探究的な活動に適用するまでに至っていない傾向が見られます。本校数理データサイエンス科においては、SSH課題研究等の探究活動における利活用を想定した統計の運用方法について学ぶ「SS統計学」を学校設定科目として開発し、生徒の統計リテラシーの向上を図っています。今回は、私どもの実践を紹介させていただき、日本における統計指導のあり方についてご意見をいただければ幸いです。



国語

笠原 諭

西武学園文理高等学校 教諭

東京 大阪 オンライン

プロフィール 国語科教育におけるデジタル・シテイズンシップ教育、ポッドキャストなどの音声メディアの教育活用を主な関心領域とする。近年は高校国語科における生成AI活用に関する論考を『月刊国語教育研究』や『早稲田大学国語教育研究』に掲載、また第149回全国大学国語教育学会早稲田大会課題研究発表での登壇など、生成AI時代における国語科授業のあり方を現場実践と研究の両面から検討している。Google for Education認定イノベーター/コーチ/トレーナー。

メッセージ 現行の学習指導要領のもとで、「現代の国語」「論理国語」をどう授業にしていけるか、多くの先生方が悩みながら実践を重ねてこられたのではないのでしょうか。実用的な文章の扱い、「読むこと」に偏らない「話すこと・聞くこと」「書くこと」の充実とは異なる挑戦でした。さらに生成AIの登場により「国語科で何を学ぶのか」もいま改めて問われています。今回は、「変わっていく国語」と「変わらない国語」の両方を意識しつつ、生成AIをはじめとしたデジタル活用やポッドキャストなどの新しい学習材を取り入れた授業実践などを実際に体験していただきながらお伝えします。探究的な学びの基盤となる高校国語の幅広さと豊かさを、一緒に考える時間にしましょう。



地歴公民

島津 聡

東京都立 八王子東高等学校 主幹教諭

東京 大阪 オンライン

プロフィール 地理歴史科(日本史)教員。特別支援学校、定時制高校を経て、歴史教育と探究学習の接続を軸とした授業・カリキュラム開発に取り組む。「歴史総合」教科書執筆者、『大学入試問題正解 日本史』(旺文社)解答者、編著に『山川セレクト 大学入試精選問題集 日本史』など。現任校では探究カリキュラムの立ち上げや地理と連携したフィールドワーク型授業、カナダでの海外フィールドワーク、DX事業を担当し、大学・企業・地域との連携を基盤に、生徒が自ら問いを立て、多様な他者と協働しながら歴史と現代社会を往還して思考する学びの創造に取り組んでいる。

メッセージ テーマ「問いから問いへ～歴史学習と探究の往還を促す組織的実践～」

歴史の学びの深まりはどこから見とるべきなのでしょう。私は歴史的な見方を縦横に用いて生徒自身が問いを立て、問いを深め続ける過程にこそ、その本質があると考えています。八王子東高校では、「歴史総合」の教材開発と探究カリキュラムの検討がほぼ同時期に進んだことを機に、「歴史を教えること」と「探究すること」を改めて問い直してきました。こうした取組みには継続性や一貫性の面で課題が有ることも多少少なくありません。担当者全員で指導方針を共有し組織的に実践を重ねるなかで見えてきた、歴史学習の新たな可能性について、皆さまと考えてみたいと思います。



情報

能城 茂雄

東京都立 三鷹中等教育学校 指導教諭

東京 大阪 オンライン

プロフィール 奈良先端科学技術大学院大学 情報科学研究科 博士前期課程情報システム学専攻修了(工学修士)。情報経営イノベーション専門職大学(IU)客員教授。Adobe Creative Educator Innovator。2016年度(平成28年度)の「GIGAスクール構想」以前から教育現場での一人1台端末の運用・研究活動を主導。現在も情報関係研究指定校の主担当として最前線で活動を続ける。文部科学省の学習指導要領等改善に係る専門的作業等協力者(共通教科情報)として学習指導要領や同解説の作成に尽力。さらに、文部科学省 高等学校情報科「情報I」「情報II」教員研修用教材検討委員および同WG委員も歴任した。主な著書・執筆に、日本文芸出版『情報I』検定教科書、『授業から共通テストまで 1冊で徹底マスター「情報I」』(大修館書店)、『情報最新トピック集』(日経BP/日本文芸出版発売)などがある。

メッセージ 講演タイトル「デジタルで変える生徒の学びと先生の働く環境～教えるから「自ら学ぶ」授業への転換と学校DXの実践～」予測困難なVUCAの時代、教育現場では従来の「知識を教える」授業から、生徒が「自ら考え、学ぶ」授業への転換が求められています。本分科会では、都立三鷹中等教育学校での実践をもとに、一人1台端末やクラウド、生成AIなどを活用し、生徒の主体性を引き出す具体的な授業の仕掛けをご紹介します。さらに、生徒の学びを支える先生方の働き方改革として、東京都立学校における校務のデジタル化やフリーアクセス職員室の導入やDX化推進についてもお話しします。